

第3回筑波技術短期大学視覚部海外研修

筑波技術短期大学視覚部一般教育等¹⁾ 同庶務課研究協力係²⁾ 同理学療法学科1年³⁾ 同情報処理学科1年⁴⁾
 ポーリー・マーティン・エドモンド¹⁾ 柳田なみ子²⁾
 上月麗音³⁾ 永阪知寛³⁾ 濱田美保³⁾ 小松田晃子⁴⁾

要旨：平成14年7月11日から7月23日までの13日間、視覚部海外研修を実施した。教職員2名及び学生4名の一行は本学と大学間交流協定を締結している米国ニューヨーク州立大学バッファロー校及びロチェスター市にあるナショナル聾工科大学等を訪問し、視覚及び聴覚障害の高等教育並びに様々な障害者への支援体制について見聞した。国或いは地域によって、障害者の教育、支援の方法は様々であることが実際の体験を通して明らかとなった。

キーワード：視覚障害 聴覚障害 障害者支援 海外研修 大学間交流協定校

1. はじめに

我々は、ニューヨーク州立大学バッファロー校 (UB: State University of New York at Buffalo) のゲストハウスに滞在し、同大学の福祉機器センター (CAT: Center for Assistive Technology)、英語研修センター (ELI: English Language Institute) 等での学内施設の視察や体験、学生のために UB が企画したイベントへの参加、またバッファロー近郊にある視覚障害者のための盲人協会、生活自立プロジェクトへの訪問を通して、特に視覚障害の研究、サポートについて研修した。次にロチェスター市にあるナショナル聾工科大学 (NTID: National Technical Institute for the Deaf) を訪問し、聴覚障害者の高等教育現場の視察を行った。なお、視覚部での学生の海外研修は3回目である[1][2]。

2. 米国ニューヨーク州バッファロー市内での研修

最初に訪問した UB では、ゲストハウスに8日間滞在し、市内の視覚障害者の施設及び学内の施設視察を行った。訪問先はヘルスサロン、盲人協会及び生活自立プロジェクト、また、UB 学内では、CAT、ELI 及び学生健康センター (Wellness Center) である。

2. 1 ヘルスサロン

バッファロー市に到着した次の日、市内にヘルスサロンがあると聞き、その店に行くことにした。そこは、マッサージセラピストの Ms. Joanne Vacanti という白内障を患った女性の店で、美容院の一室に25平方メートル位の広さのマッサージ室にベッド一人分を設置し、ソフトなバックグラウンドミュージックを聴きながら、リラックスした雰囲気ですマッサージを受けられるようになっていた。指圧師の資格も取得している彼女のマッサージの方法は、ホウホウバ (ツゲ科の植物) 油を利用したスウ

エーデン方式のオイルマッサージであり、肌にもよいと説明してくれた。とても衛生的な環境の部屋で一人30分から1時間のマッサージを受けることができるようになっていた。マッサージ方法を学ぶ本学学生にとっては、将来の職として関連する実体験には多くのことを学ぶ機会だったに違いない。

2. 2 盲人協会 (Olmsted Center for the Visually Impaired, formerly the Blind Association of Western New York)

次に訪問したのは、同市内にある盲人協会である。ここでは、Ms. Jan Hall が施設案内や概要説明してくれ、視覚障害者用の拡大読書器や朗読を録音したテープ、娯楽用品としては数字を拡大し見やすくしたトランプ等があり、視覚障害者が様々な情報を得られるようになっていた。また、彼らの仕事現場 (ミシンを利用したソーイング) も見学でき、障害保障を行うことにより、機械を利用した軽作業ができるようになっていた。また、白杖を使つての歩行の仕方、盲導犬を使った歩行訓練、弱視及び視覚に障害をもつ高齢者のために生活用品の使い方や点字トレーニング等生活支援やアドバイス、視覚障害のある子供に対する視力検査等多岐に渡る支援が行われていた[3]。

2. 3 生活自立プロジェクト (ILP: Western New York Independent Living Project)

当センターの所長は、Mr. Douglas Usiak という全盲の方であった。彼は、我々一行を会議室に案内してくれ、センターの役割や仕事内容について詳しく説明してくれた。このセンターでは、視覚障害者が生活していくための様々な障害のレベルに応じた指導や相談ができ、生活支援やサービスは年間のべ1万件以上の視覚障害者の利

用があるとのことであった。また、障害のレベルに応じた補償の研究も行われ、障害者は、電話やインターネットを通して、生活支援や情報補償を受けられるとのことであった。

本学の学生が1年間 UB に留学した際、やはり ILP を利用し、ILP のスタッフ及びボランティアの方から発音や音読の支援を受け留学生活を送ったとのことであった [4]。

2. 4 UB 学内の福祉機器センター (CAT: Center for Assistive Technology)

CAT で最初に会ったのは、盲導犬とパソコンを利用し、秘書業務を行っている全盲の女性であった。我々は、彼女を通して Maurizio Trevisan 所長及び John Stone 教授に会い、CAT の概要説明や施設案内をしてもらった (図 1)。ここでは、感覚障害だけでなく、様々な障害を持っている人々の機能を向上させるための福祉機器の開発研究及びその専門家教育等を行っているということで、これにかかる研究経費は、主に財団、民間会社からの寄附金等で賄われているとのことであった。また、機器等のメンテナンスには専門の職員を配置し、機器の異常にいつでも即座に対処できるようになっていた。

また、障害者の住環境をよくするための設備が整ったモデルルームが設置され、居間、台所、浴室などには、生活に必要なものが手で届く範囲でセットされていたり、電話の数字を大きい絵や写真を用いて表示したり、安全や機能面にあらゆる工夫が施されていた。



図 1 CAT で Maurizio Trevisan 所長 (右) 及び John Stone 教授 (中央) とともに

2. 5 UB 学内の障害者のためのサービスセンター (Office of Disability Services)

所長の Randall E. Borst 氏の案内で所長室に招かれ、センターの業務や研究内容等について丁寧な説明を受けた。このセンターでは、障害を持つ学生のためにカウンセリング等を行っており、アメリカにおける障害者の高等教育の現状について説明を受けた。Borst 氏ご自身も強度の

弱視であるため、研究用には補償機器として視覚障害者用のパソコンや点字を利用し、その障害を感じさせない研究とアメリカ障害者高等教育学会長に就任されるなど精力的に活躍されていた。

2. 6 UB 学内の英語研修センター (ELI: English Language Institute)

このセンターは、ゲストハウスのある South キャンパスから車で20分ほど離れた North キャンパスにあった。留学生のために英語教育を行っているセンターで、授業は能力別に10人前後の少人数制でクラス分けされ、我々一行の学生も2名ずつに分かれ授業に参加した。授業では、視覚障害の学生には、テキストの文字を拡大したものを用意してくれ障害を持つ学生も普通の学生に混じって授業が受けられるように配慮されていた。また、学生は、ドイツ、南アメリカ、アフリカの学生以外、日本、中国、韓国、台湾とアジア地域からの留学生が多く、アメリカ社会を学ぼうとする人気の高さと健常者のみならず障害を持つ学生の受け入れ体制が充実していることが伺えた。

また、South キャンパスと North キャンパス間は無料の学内連絡バスが15分から20分間隔で運行され、キャンパス間の移動には大変便利であり、短期間ではあったが快適なキャンパス生活を送ることができた。

2. 7 UB 学内の学生健康センター (Wellness Center)

UB で我々が最後に立ち寄ったのは、学生健康センターである。薄暗い部屋があり、最初は何の部屋かわからず、向かい側の明るい部屋に勤務していた女性職員に聞いてみた。彼女の説明では、学生の安らぎの場所として設けてある部屋で、コーヒーを飲んだり、マッサージ器を使用したり、安らいだ香りのする枕を利用して仮眠ができたり、アロマセラフィ的療法を利用したりリラックスできる部屋であった。

UB の学生はこのような部屋を利用して、気分転換を図ったり、休養をとったりしているようで学生の心の健康にも配慮しているとのことであった。

3. 米国ニューヨーク州ロchester市での研修

3. 1 ナショナル聾工科大学 (NTID: National Technical Institute for the Deaf)

バッファロー市から約120 kmほど東に位置するロchester市に聴覚障害者のための高等教育機関であるナショナル聾工科大学がある。すでに、本学は同大学と大学間交流協定を締結しているが、平成13年度からは聴覚

障害者のための国際大学連合ネットワーク（PEN-International：Postsecondary Education Network-International）に関する研究協力協定を締結し、聴覚障害者のための最高水準の高等教育プログラムの確立を目的として、聴覚障害者のための職業教育や機能開発などの研究を行っている。その情報通信手段としてテレビ会議システムを導入しているが、我々もそれに参加させてもらい、聴覚障害者の高等教育の実際を一部体験することができた。

また、我々を案内してくれたのは聴覚に障害を持つ女性のガイドで、教職員や学生のための自習室、研究室の視察もでき、NTIDでは、聴覚障害学生のために高水準の教育・研究が実施されていた。

4. UBの研究者及び学生、バッファロー市民との交流

4.1 ナイアガラの滝

バッファロー市は、カナダとの国境の近くに位置し、近くにはナイアガラの滝があり、多くの観光客で賑わっていた。我々もナイアガラの観光船に乗船し、流れ落ちる大量の水の轟音や煙のように舞い上がる水しぶきの凄さとともに日本では経験できない大自然の豪快さを体験できた（図2）。



図2, 3 ナイアガラの滝にて

4.2 UBイベント

UBの企画で、ベースボール観戦や野外ジャズコンサートへの参加企画があり、宿泊したUBのゲストハウスの仲間たちに同行した。このような行事に参加することで、仕事からは感じられないアメリカ人の楽しさと陽気

さを感じ取ることができた。また、このようなイベントを通じ、アメリカ人だけでなく、数カ国の学生との交流の機会があり、アメリカにいながら国際的交流ができたことは、当初の目的以上の成果が得られたと思う。

4.3 UBの研究者及びバッファロー市民との交流

研修の最後に近づいたある日の夕方、我々は、本学で実施した第2回日米国際シンポジウムのシンポジストであるUBのJohn Stone教授の自宅のパーティーに招待された（図4）。ご家族からは、大変歓迎を受け時間を忘れて大学のことや家族のこと等世間話に夢中になってしまった。

また、近くに住むJedさん宅にも招待され、現地に住む人々との交流ができ、アメリカを十分に満喫できたようである。



図4 John Stone 博士宅にて

4.4 エリー運河（Erie Canal）

この運河は、オルバニー市からバッファロー市に続いており、ボートクルーズが楽しめ、観光客で賑わっていた。約50人乗船できる2階造りのボートでは、3時間ほどのクルーズの間に食事もでき、ゆったりした運河の水の流れとスケールの大きさを実感できた。

また、バッファロー市で知り合ったJedファミリーとともにエリー運河のボートクルーズの後、ロチェスター市内を散策でき、アメリカ研修の最後の思い出となった（図5）。



図5 米国ロチェスター市にて

5. 学生の感想

上月麗音（理学療法学科 1年）

今回、アメリカ研修に参加することで「日本とアメリカの違い」について興味を持ちました。例えば、食べ物を例にとってみると、日本でよく見る牛乳パック1ℓ位が普通だと思うのですが、アメリカサイズは通常3.8ℓ、食べ物についても、また、家の大きさなど、日本より大きいことが私にとってアメリカでの最初の関心事でした。

そんなきっかけで、研修中「アメリカと日本の違い」について目を向けるようになりました。「アメリカ」という国は「日本」という国と比べて、個人が尊重されている気がしました。

例えば、社会福祉制度の中でも、アメリカでよく見る「盲導犬」の存在でした。日本では盲導犬を見る機会あまりに少なく、実際、この視覚障害者の学校というべき技短でさえ、一匹の盲導犬もいません。でも、アメリカ（バッファロー等）では盲導犬をよく見かけました。まるで、当たり前のように、というよりもそれが当たり前な国でした。盲導犬は個人のパートナーとして大切な「モノ」です。逆にアメリカに無くて驚いたのは、「点字ブロック」が無いことでした。誰もがその上を歩き、盲人の誰もが使う「モノ」です。日本の多くの歩道にはついているものです。そこにあって普通なものでも国の違いだけでそこにないので普通です。盲導犬、点字ブロック両方あれば、もっと生活は楽になるのに、そう思うのも一つ、でもどちらかを選ばなければいけないとき、盲導犬が飼える環境でない時とか、考えると、今の「日本」の方がいいのかな、などと思いながら、アメリカの研修を有意義に過ごしていました。旅の途中、アクシデントもありましたが、無事帰ることが出来て満足です。

永坂知寛（理学療法学科 1年）

出発の朝、私達は短大に集まったが、これとって旅立つ実感はなかった。そして、成田に着いたことに少し実感がわいてきた。飛行機に乗ると、騒音でほとんど眠れなかった。スチュワーデスの英語が速くて全然分からなくて、スチュワーデスも困っていた。結局、ジェスチャーをしてくれた。いざ米国に着いてみると、疲労で米国を実感する余裕はなかった。ゲストハウス（大学の寄宿舎のような所）に着くと、Jeff と Robin が迎えてくれましたが、それ以外の留学生の人達とはほとんどコミュニケーションをとる機会はなかった。しかし、僕はせっかくの機会だと思い、たいした会話力のないが、とにかく話し続けた。すると、正確に理解できなかったが、何か通じて和気藹々と団欒することができ、非常にためになる体験ができた。

また、びっくりした点は、とにかく食べ物、体格、ナイアガラの滝などといったものの大きさのスケールが違いすぎた。ゲストハウスに滞在中、朝飯は自分たちで作っていたので（ほとんど女子が作ってくれたが）、食材の調達は近くのスーパーで済ましていたが、売り物がすべてジャンボサイズという感じがして、お土産にもってこいと思い、買い過ぎなくらい買ってしまった。

UB の学長や様々な施設の人の言語は理解できなかったが、日本人とは違った柔らかい雰囲気だった。また、留学生を対象にした英語研修クラスを受けたが、日本の中学校のレベルだったので、物足りなかった。

そして最終日、やっと帰れると思った矢先に、悪天候のために帰る日が一日遅れることになった。もう、みんなの体力は限界だった。次の日も機体故障のために6時間くらい遅れて帰国となった。めったにない体験をしたけど、本当に疲れた。

学校に着くと、同級生みんなが花火を鳴らして迎えてくれたので、疲れが少し楽になった。ツアーでは、経験できないことばかりで本当によかったです。

濱田美保（理学療法学科 1年）

今回の海外研修では、アメリカでの障害補償について知ることや語学の向上が目的であったがそれだけではなく、アメリカの文化についても知ることができ、多くのことを学ぶことができた。

アメリカでは、障害者を支援するための様々な施設を見学することができた。視覚障害者が盲導犬を連れていくことは当たり前であり、障害者支援センターでも盲導犬を多く見かけた。日本ではアメリカに比べるとまだ盲導犬が普及していないように思われる。逆に、日本では点字ブロックを多く見かけるがアメリカではあまり見かけなかった。視覚障害者のための拡大図書やスクリーンリーダーなどは日本と同じように使用されていた。また文字盤の大きな時計や大きなトランプなど、視覚障害者が使用しやすいように工夫された様々な日用品なども見ることができて面白かった。

施設見学以外では、ナイアガラの滝を見に行ったり、野球観戦に行ったり、バーベキューに招待されたり、買い物をしたりとアメリカの生活について知ることができた。バーベキューに招待されたときや買い物では地元の人と直接話すこともできて、聞き取りも自分が言いたいことを伝えるのも難しかったが、生の英語に触れられていい経験になった。スーパーマーケットで買い物をしたときには、洗剤やジュースなどすべてのものが大きくて、日本では見たことがないチーズなど色々なものが売られていて、見て歩くのが楽しかった。食事はメキシコ料理、

韓国料理、寿司など様々な料理を食べることができた。多国籍に料理が食べられるのは、人種のるつぼであるアメリカならではの感じた。

初めのうちは、コミュニケーションが取れるかどうか心配だったが、地元の人には気さくな人が多く、私達が聞き取りやすいようにゆっくり話してくれた。英語を話せるに越したことはないが、言葉が通じなくてもお互いに伝えたいという意識があればコミュニケーションは取れるものだと感じた。単語の羅列でも伝えようと努力しできるだけ声に出して話すことが英語を上達させるためには大事なのだと感じた。今回の研修では色々なことを経験することができた。この経験をこれからも生かしていきたいと思う。

小松田晃子（情報処理科 1年）

私はこの夏休みにアメリカ研修に参加し、今まで日本にいただけでは学ぶことが出来なかった様々なことを体験し、学ぶことができた。その中の一つとして挙げられることは生の英語に触れられたということだ。そのことが私にとっては最も貴重な体験となった。だが、時に相手の言っていることが分からなかったり、自分が伝えたいことを相手にきちんと伝えられなかったりしたこと、自分の英語の能力の未熟さにも気づかされた。

また、NTIDをはじめ、様々な場所や施設を訪れ、たくさんの方々に会い、たくさんのお話を聞いたり、アメリカの文化や生活の一面も見ることができた。普段は勉強できないようなことも見て学んで来ることができたことを嬉しく思う。

そして、アメリカでの障害を持った人に対する障害補償のあり方などを見ることによって、諸外国の進んだ福祉体制を知ることができた。日本では、まだまだ障害者に対するこのような制度は整っておらず、今後の福祉社会では必要だと考える。

研修旅行中の短期間だけだったがELIに参加できたことも私にとって貴重な体験だった。アメリカの授業内容、進行の仕方、また教育状況なども自ら体験して学べたことをとっても嬉しく思う。日本の授業のあり方、進行の仕方も教師中心ではなくアメリカのように学生が自ら進んで学ぶような環境にすることが出来たら今よりも積極性や、実力、自ら学ぼうとする意欲が身につくのではないだろうか。

様々な点で考えさせられることも多かったがとても中身の濃い研修旅行だったと感じている。アメリカで出会った方々や、先生方などたくさんの方々の多大なご協力がなければこのような研修旅行は成功しなかったと思うので、そのようなたくさんの方々に感謝したい。そして

また機会があれば是非もう一度訪れたいと思う。

6 最後に

今回の海外研修では、米国の障害者支援の実態及びその研究について深く学ぶことができた。主に聴覚・視覚障害者の社会を重点的に研修してきたわけであるが、CATの全盲の女性秘書やNTIDでガイドをしてくれた聴覚障害者の女性などであっても障害補償をすることや障害者自身の努力により、健常者とともに違和感なく仕事に溶け込んでいるように感じたのが印象的であった。これは、やはり米国内法により障害者の権利が保障されていることとバリアフリー社会であることによるものであると思われるが、反面、障害者のための最先端の研究を行っているとはいえ、障害者の生活環境においては、歩道や建物内に点字ブロックが全くないことや往來の激しい交差点などに盲人用信号機さえなかったのは、意外な感じがした。

このことから、国によって、障害者への補償としてどこを重視すべきなのか、考え方の違いがあることが分かったような気がした。

また、障害者を支援する方法として大切なのは、障害者にとって自立心を養えるような生活環境の整備と、そして自立する努力ができるように促すことであると感じた。

今回の研修は、財団法人筑波技術短期大学教育研究助成財団からの寄附金による事業の一環として実施されたものであり、参加した学生はもちろん教職員にとっても様々な新しい見識と経験を得る唯一の機会であった。

また、アメリカ国内での様々な施設でお世話になった方々、並びにこのような機会を与えてくださった学内の方々に対し、深い感謝とお礼を申し上げたい。

参考文献

- [1] 一幡良利，ポーリー・マーティン・エドモンド他：第1回筑波技術短期大学視覚部海外研修，筑波技術短期大学テクノレポート7，163-169，2000
- [2] 伊藤隆造，ポーリー・マーティン・エドモンド他：第2回筑波技術短期大学視覚部海外研修，筑波技術短期大学テクノレポート8，211-216，2001
- [3] Elizabeth Pierce Olmsted, M.D. Center for the Visually Impaired 2002 brochure
- [4] The Western New York Independent Living Project (ILP), Annual Report, P.4~14 2000-2001

Third Study Tour to the United States of America from the Division for the Visually Impaired, Tsukuba College of Technology

Martin PAULY¹⁾, Namiko YANAGITA²⁾, Akiko KOMATSUDA³⁾
Tomohiro NAGASAKA⁴⁾, Miho HAMADA⁴⁾, Rene KOUZUKI⁴⁾

- ¹⁾ Department of General Education, Division for the Visually Impaired, Tsukuba College of Technology
- ²⁾ Research Cooperation Section, Tsukuba College of Technology
- ³⁾ Student of the Department of Computer Science, Division for the Visually Impaired, Tsukuba College of Technology
- ⁴⁾ Students of the Department of Physical Therapy, Division for the Visually Impaired, Tsukuba College of Technology

Abstract : A group from the Tsukuba College of Technology visited the State University of New York at Buffalo (UB) and the National Technical Institute for the Deaf (NTID) from July 11th until July 23rd, 2002. This was the third such study trip. One member of the faculty, one from administration, and four students from the Division for the Visually Impaired participated.

At UB, we toured the Center for Assistive Technology (CAT), which conducts research and provides education and services for adaptive devices, visited the Office of Disability Services, which coordinates accommodations and services for students and employees with disabilities, and attended classes in the English Language Institute (ELI), which prepares international students for university study. We were also invited to join in activities sponsored by the ELI. These included a bus trip to the Summer Jazz Festival at Albright-Knox Art Gallery and a subway ride to watch an evening professional baseball game. (During this time one of our students from the Department of Physical Therapy, on a one-year program at UB, joined in several of our visits.)

To learn about support services and social resources for disabilities in the US, we visited the Olmsted Center for the Visually Impaired (formerly the Blind Association of Western New York) and the Independent Living Center of Western New York. Extracurricular activities included visits to Niagara Falls, the Italian Heritage and Culture Festival, a therapist of Swedish massage, and a home barbecue with the family of a UB faculty member.

In Rochester, besides having a tour of the computer center and facilities of NTID (which has a long-standing exchange program with the Division for the Hearing Impaired), we took a cruise on the Erie Canal. Individual impressions/reports by participating students are included.

Key Words : Visually impaired, Hearing impaired, Disability support, Overseas study trip, Sister college